

歪んだり滞った気の流れを変える力を持つ彫刻

「木には精神的なエネルギーを浄化してくれる力があります」

→愛車「翼号」にまたがり斧を握りしめる安藤さん。



安藤 栄作 さん

出会った木を手斧だけで彫り刻んで作品を作る

福島県いわき市に住んでいた彫刻家の安藤栄作さんは、311の津波で自宅や作品を流され、原発事故で30km圏内だったので奈良に避難移住してきた。その後は原発賠償関西訴訟の原告になる一方、生活と仕事再建のため必死で制作に励んできたが、その結果、円空大賞や平柳田中賞などを受賞。また毎年展覧会を開き意欲的に制作発表している。

これまで本紙ではミュージシャンや絵描きさんにはよく登場してもらってきたが、彫刻家というのは身近な友人知人でもないないので、彫刻とはどういうものなのか、今のようなコロナや放射能汚染の時代にどんな存在なのかということにも興味があり、お話を聞かせてもらおうことになった。

彫刻家への道

●子供のころから一日中粘土に触ってるような子で、小学校の授業中に机の下で粘土をやったり(笑)。クリスマスや誕生日のプレゼントは何がいい?って言われると「粘土!」って。とにかく粘土が好きだったんです。平面じゃなく自分が生きてる現実のこの次元で新しくものが生まれてくるっていう、そのいさぎよさっていうのが好きで、あとは身体を動かして体感的に何かを生み出すのが好きでした。

そして彫刻の写真集を見た時に、彫刻家っていう人達がいるんだと気が付いて、どうやったらそこに行けるんだろう。自分も彫刻家になりたいなと思ったんです。それが高校一年の終わりくらいでした。そして高校2年の夏から、目白にある水道端美術学院という美術予備校の彫刻科に通うようになり、そこから彫刻家に向かって歩み始めたんです。

彫刻家なんかでは食っていけないって廻りが言っても、どうせ生まれてきていつかは死んじゃうんだし、やってみたいと思ったんだから、自分をそこに投げ込んでみよう。そのかわり本気でやろうと。本気でやらなかったら後悔すると。

— 彫刻といっても木彫だけでなくいろいろあるんでしょね?

●そうですね。浪人から大学受験、そして大学に入ってから粘土で人体を作ったりというのがベースになるんです。いわゆる彫刻って心棒をつくり粘土をはりつけながら作るという、計画的に進めていくんですけど、それはちょっと自分には体質に合わなくて、一気にぐわーっとやる方なんです。

大学では金属もやり石も彫り、木彫もやりと、一通りやるんですが、大学のころは石を彫ってました。大学を出てから大学院は落ち、食えなくて植木屋のバイトをやってたんです。

ふつう美術系の大学って、出たら8割方が大学院に行くんですよ。そのあと徐々に公募展に出したりとかしながらだんだん作家になって、大学の助手やったり講師になったりしていくんです。それがいわゆる日本で彫刻家になるステップなんです。だからまず大学院でつまづくと(笑)ちょっと違う方向に行った方がいいんじゃないってかんじなんですよ。で、植木屋のアルバイトしながら埼玉の農家の納屋を借りて、そこの上に住んで下で彫刻を細々作ってたりしたんです。

— 木彫はその頃からやってたんですか?

●植木屋で剪定した木は捨てられちゃうんですけど、それとか道を歩いて庭先の木や街路樹が切られてゴミ捨て場に投げられるのがあると、それが自分に見えたんですよ。社会から要らないって思われて、ただ道ばたでそのうち腐って無くなるだろうって転がされてるような。そこで、これを生かしたいなと思ったんですよ。自分で自分を生かさなかったら、誰も生かしてくれないって、この木を自分が使わなかったら、誰も使わないと。ただ腐食して地面に還るだけだなど。それが木彫の始まりですね。

材料を買うお金もなかったんですけどよかったんですけど、その木を使って彫り出したのが始まりです。

だから木を買うのはやめようと思ったんです。世の中からいられないと思われた材料をひたすら使って、それを生かすというか、それでまた何かこの世に生まれるっていう、そういう立ち位置でやろうと。

その後、いろいろあって福島に20年いたんです。福島の山の方に15年住んで、そのあと海の前に5年。で、その間はぜんぶ捨てられた木で作って、買ったことなかったです。そういうのを使っていると、あちこちから「安藤さん、こういう木を使わない?」とか、「今度こういう木が道路工事で伐られちゃって、使ってもらいたいんだけど」とか、「学校

でシンボルだった木が枯れて伐られちゃって、安藤さん使うんならトラックで持ってってあげるよ」とか。そういうつながりが増えて、そういう木で一生懸命彫刻を作っているとまた来るんです。でもどういうわけか、なまけてると来なくなるんです。

木を買わずに、めぐりあったどんな木も使ってきました。

311の震災後、こっち(奈良)に来たのは50才の時ですけど、関西にくると全然つながりがないじゃないですか。まわりに伐られた木が見当たらないんです。

震災後の5月に明日香に移住したんですけど、展示会の予定が入ったんでしょがなく地元NPOのツテをたどって、桜井の材木屋さんで檜の原木を安く譲ってもらうようになったんです。今は奈良市の材木屋さんからも買ってます。こっちに来てから材木を買うようになったんですよ。それまでは材を選ぶなんておこがましい、これは使えないこれは使えるというふうに自分が選ぶことがなんか思い上がりのような気がして、めぐりあわせだと。でもこっちに来てからはつながりがなくて、自分で材木屋に行って木を選ばなきゃならない。それは自分にとってある意味屈辱というか、否定してたことをやらなきゃならない。でも震災というのは僕にとってリセットの時だったので、なんか神さまから、あんたの否定してた生き方も受け入れなさいというか、それを受け入れざるを得ない位置にさせられたような気がします。

その両方を知るというか経験して、両方を受け入れる、許すんじゃないかって、本物じゃないのかなって。どっちかだけ知ってどっちかを否定して、自分をステータス化しているというのは本当には大きくないんじゃないかと、その時なんとなく思ってた。

だから震災というのは僕にとって、それまで自分が苦手としていたことを受け入れるチェンジの時でしたね。今は、もう材木屋さんとも顔見知りになったので、桜井の原木を調達してくれるところは製材屋さんなので、「安藤さん、こんど市場に行ったら安藤さんの好きそうな、曲がりがあるのがあったんで、一本買っときましたよ」と言われるんです。製材するには曲がってたらだめなんです。製材しちゃうとがーんと高くなるんですが、丸太のままだったり皮がついたままだと仕入れ値だけで分けてもらえる。買ったとしても、自分のところにやってきた木は出会いだなーと思います。

木が浄化してくれる

●木にはいろんなこと教わりましたねー。木って生きてる時も浄化してくれますけど、伐られて材になっても浄化力があって、木のチップを枕の中に入れると安眠できるという

ように物理的な浄化ということが言われるんですけど、もっと霊的な浄化力があるかんじがするんです。人間は生きてると自分の中に、気持ち的にも精神的にも肉体的にも、いろんな澱が溜まるじゃないですか。怒りとか嘆きとかも含めて。そういうのが気持ちの中や身体の中に蓄積するわけですけど、木を触ったりなで回したりすると、木が吸ってくれるというか、木が浄化してくれるというか。霊的なエネルギーに対しても木ってそういう力を持っていて、僕は大学出て26才くらいからずーっと木を触ってきて、今59なんで33年、ずーっとほぼ毎日木をさわり続けてきてる中で、触ってなかったらもっと健康を害してたり、精神的に病んでたかもしれないとか。犯罪に流れていくところをガス抜きをして、正常な方に、精神的に守られてきたんだなと感じますね。物理的なだけじゃなくて精神的エネルギーというか。

—いま大木がブームみたいになって好きな人が多いですね。森の中に大木に会いに行って抱きついてリフレッシュしたとかいうのがTV番組になってたり。

●生きてる木はダイレクトに地球の循環の中に存在してるんで、抱きつくって循環に取り込まれて、そのエネルギーが自分の中にも流れるという力を持ってるかもしれませんね。でもそういうところから切り離されて材になっても、木が本来持ってる性質というか、ひたすら浄化するために生まれてきたものだという。そのスピリットがこういうもの(彫刻された木)になってもなおそういう働きをしようとして続けていると感じますね。それに触れることで、人間の中の精神的な澱みみたいなものを浄化するみたいなことがあるのかもしれないと思うんですよ。(笑)

—今は手斧で作ってられるそうですが、木彫といっても斧だけじゃなくいろんな道具があるんでしょうね。斧にこだわるといのはどうしてですか？

●手の延長でひたすら叩いているというようなシンプルさ。斧って何かを殺めるための道具じゃなくて、ものを作るための道具ですよ。それが原始時代から未だに人間と一緒にずっと歩いて来て、このコンピュータとかスマホとか宇宙船が行く時代にも使っているっていうのはラディカルでいいなあと。(笑)

—311の時には福島に住んでたんですね。

●そうです。僕は東京の下町に生まれて、ス



モグを吸って育ったようなものなんで、自分の子供にはやっぱり自然界が作った混ざり物のない空気を吸わせて、山からのわき水とか、自然と身体が一体である状態で細胞分裂を起こして成長してほしいと。せめて15才くらいまではそういうところで身体作りをしてほしいし、僕自身もそういうところで身体を組み替えてみたいという気持ちがあったので、福島の山の中に移住したんです。

いわき市の北東、阿武隈山地で標高は500mくらい。山の尾根沿いで、冬は零下15度くらいになるところです。山の上に高層湿原があって、その湿原の中の家なんで、雨が降ると床の下に水が来るようなところでした。その後山間地で引っ越ししながら15年住んだあと、海の目の前に5年住んで、その時に津波で家が流されました。

—その後、311の震災で奈良に移住したんですね。

●2011年の5月26日に飛鳥に避難移住したんです。そこは仮住まいだったので2012年9月までいて、不動産屋を通してここ(天理市)を見つけて移ったんです。

★今の住まいは元印刷屋だった建物で、印刷機を置いていた広い1階のスペースを仕事場(奥さんも彫刻家)にして、2階が住まいになっている。

●福島の山にいたときはほとんど屋外で作ってたし、海のそばでもすごく小さいアトリエだったんです。でも印刷屋さんの床って重い機械を置くからすごい頑丈で、こんな基礎を自分で作ろうと思ったらとんでもないんです。ただの倉庫じゃこういう基礎のところはないですから。でっかいものも入れて置けるし、水場もあるし、普通の人では使えないけど僕らが使うにはもってこいなんです。ここでやりなさいって言われたような気がして、今度の9月でもう8年になります。

★第10回円空大賞を受賞した安藤さん。その受賞記念の展示会では現存する円空作の最大の不動明王像とコラボしたインスタレ

←仕事場で斧をふるう安藤さん。後ろには福島で飼っていた愛犬ユイやアマビエなど様々な作品が置いてあった。



↑第10回 円空大賞展での展示 原発事故ドローイング 円空仏不動明王 鳳凰・千体の人型 空気の狭間によるインスタレーション 2020

一 ションを披露した。

— そんな文化財を使った展示が出来るんだ！と写真を見てびっくりしました。

●ふつうは貸してくれないです。それに貸し出していうと基本 ガラスケースの中に入ってます。今回僕以外の5名の作家さんたちはみんなそういう形で、独立したケースの中かウィンドーの中に入っていました。僕の場合、一番大きな像がまわってきて、ガラスケースに入れられる大きさじゃなかったし、ウィンドーの展示スペースがなくて、担当者の人と話してるうちに仏像の所有者のお寺さんの方に聞いてくれたんです。それで岐阜県高山市の素玄寺に挨拶に行き、住職と話込んでいるうちに、「安藤さんの思うように自由に使って下さい」と正式な許可をいただいたんです。

★その結果、巨大な原発事故のドローイング作品の中に円空作の不動明王像がむき出しでコラボするような形で展示が実現した。県の担当者もいまだかつてそんなことはなかったですととても喜んでいたり、見に来た人達も衝撃を受けた人が多かったという。

●こういうことがやりたかった！とすごい幸せでした。主役はほとんど円空仏で、僕の作品はそれを盛り上げるような役だったんですけど。

— 彫刻の役割というのは何なんだと思いますか？ 絵とか音楽とはちがうものが。

●彫刻って現実の世界にボクらと同じように存在するじゃないですか。ここに空間をつくって、それまではなかった空間の圧とか、空間自体が変わってるということですね。

例えば広い展示室のまん中になにかモノが置かれると、ただモノが置かれたようにしか見えないじゃないですか。でもいい彫刻って、置かれたことによってその空間全部が変

和感を感じたと。それは頑張るうぜとかっていうより、逆に都庁がコロナに感染したような感じを受けるし気持ちはずんとすると。東京は西側に高い建物をたてると、西から風がくるんで、風水的には気が良くなるって。で、都庁っていうのはあんまりいい状態ではない。でもその歪みというか滞ってしまった気の流れを変える力を持つてるのは彫刻なんだよねって書いてたんです。それは都庁と同じくらいの大きさのものを置けるというんじゃなく、新宿の街の中のここだよっていう場所にこれくらいの小さな彫刻が置かれることによってでも大きな気の流れを回復させたり。もしかして彫刻ってほんとにそういう役割のために生み出されてるのかなって、それを読んだ時に思ったんですよ。

原始時代からうみだされてきた彫刻って、道具でもなくクラフトでもなく、彫刻っていうものとして認識してきたものの核心をついてるのかも。

いわゆる経済社会の中のアートの彫刻は鑑賞物でもあるけれど、実は鑑賞物よりももうちょっと精神的なものだったり、気の流れを変えたりするツールとして、道具として存在すると思います。

— 311以来、脱原発とか社会的な活動をするようになったんですか？

●避難移住してからですね。原発賠償関西訴訟の原告なんで、大阪地裁に2ヶ月に1回行って原告席に座ってます。

うちの場合は津波でぜんぶ流されてしまっていて、それで原発事故もあって、唯一ちょっと残ってて見つけたものも持って行けなかったんで、こっちに来てからも「それは大変でしたねー」と誰もが話を聞いてくれる。だから僕は裁判しなくてもいいし、自分のエネルギーはぜんぶ彫刻をやって生きることです。どんどん前に進んでいけばいいんですけど、でもそれでは被災者であり避難移住者である役割を負ってないというか、原発事故そ

化していくんです。というのは、その空間に入った人の状態を変化させる。物理的にそういうことが起きてるといふ芸術なんです。

今日、神奈川県立近代美術館館長の水沢さんがフェイスブックに書いてたんですけど、昨日でしたっけ、東京がまた東京アラートってということで都庁やレインボーブリッジなんか赤くなったりしてることに、すごく違

のもの問題、政府にも責任があるし東電にもあるし、孤立していく自主避難者と社会のあいだを埋める役割もあると思うので、裁判の原告になって、なるべく自分なりにネットとかで発信して、自主避難者とつづうの人達、福島に残ってる人達、原発事故の影響を受けた人達と津波で被災した人達のつなぎ役という立ち位置になってますね。被災のしかたが違いますから。それに今コロナになったんでみんな大変です。

— そのコロナのことで、さいしょコロナが広がった時、311の時と似てるなと思ったんですが、いまコロナ危機は文明への警告だと言われたりもしてますね。

●まずコロナ菌が自然発生的なものなのか、それとも人為的につくられたものか、そのへんの大元のところが何なのか解明されてないですよ。まだコロナ菌がどういうものかと解らない段階では答えが言えない。でもやっぱり空振りであっても用心すべきだと思うんですよ。

そしてたとえば原発事故が人類への警告だと言っちゃおうと、そこで思考停止するとうか。やるべきことから意識をそらしてしまう。コロナが自然からの警告だということかこいいですけど、いや、それはずっとあとになって答えが出てからにしようと思います。原発事故では、補償金を払わなくていいように都合のいいように放射線の数値を国際基準よりあげて、それに達しないからもう原発のそばに帰っていいですよとったり。そういうことを僕ははさんざん見てきたわけです。政府ってこういうときにどういうふう動くのかとか、大企業ってどういうふう動くのか。なんかもうわかつちゃったというかね。

それがコロナのことでまたやられたらたまないなって思いますね。放射能の場合は避難移住して自分が安全だと思えるところに離れられたじゃないですか。だけどコロナの場合はこんなかんじで感染が広がってるので、原発事故で使えた自分の安全の守り方が通用しないことがまま起きてきてますよね。だから原発事故の時に政府や大企業がやったように、彼らの都合で操作された情報を流したりされたら、原発事故どころじゃないだろうなと思います。すごく怖いなと。

★コロナ「自粛」中にはミュージシャンや講師などオンライン・リモートライブ/講座が流行っていたが、安藤さんも彫刻家としてネットでオンライン講座を何度も開いている。それは「銀河芸術大学「斧による木彫」オンライン講座」というタイトルがついていて、木彫の具体的な方法から始まり、「彫刻筋の鍛え方」とか「彫刻ストレッチ」はまだ彫

刻に關係ありそうだと「ウクレレ圧縮奏法」「パソコンマウス画ドロイング」「靈的メンテナンスの実践」などなど、これは「虚構新聞」並みの面白さだ。まだ動画は見れるはずなので彫刻には興味ない人もどうぞ！

—オンライン授業はどういう気持ちでやろうと思ったんですか？

●ほんとにリモート授業してる大学の先生とかが見ると、こんな茶化しやがって！いい気なもんだぜって怒ったりするかもしれないですけど、みんなコロナで家にいるし、なにか面白い動画をアップしようかなと思ったんです。いちおう彫刻家っていう専門家じゃないですか。だから専門家が冗談でやるっていうのをやりたくて、でもよく見るとすごい専門的なヒントとかスピリットが実はそこにあって、冗談のカムフラージュをしてるという…（笑）。



「カーテン」
安藤榮作マウス画

INFORMATION

絵本「あくしゅだ」

【安藤榮作著/A4版ハードカバー 32p/
¥1500+税/クレヨンハウス刊】

彫刻家の安藤さんがマウス画で描いた初



めの絵本。「2011年3月11日 あの日、私達は何を失ったのだろう。……それでも僕らは大地を海を大空を、そして人間を変わりなく愛し続けている。ほんとうの繋がりは

僕らの内側にある。」

★安藤さんの書籍には他に当時地元のいわき民報に連載していたエッセイをまとめた本『降りてくる空気』がある。

【A5版 101p/スモルト刊】

★安藤さんのネットでの情報は：

<https://www.facebook.com/profile.php?id=100003315392866>